
咎人のRequiem

濤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咎人のRequiem

【Nコード】

N8462Q

【作者名】

漣

【あらすじ】

無秩序な世界で暗躍する『咎人』。それも狩るために存在する『咎人送り』。彼等は世間から隔離された存在であり世の救世主でもある。美形×美形あり、絆あり、シリアスありの断罪ファンタジーです。

プロローグ（前書き）

滞が送るシリアス&コメディー要素も入った作品です。

至らない部分も多々ありますが温かい目で見守っていただければ幸いです！

プロローグ

人は神に裁かれ、神は罪のいう概念を持たない

じゃあ何故人は断罪を受けるのか

そんなの決まってる

それがこの世の“理”

それ以外の何物でもない

そのまま重力を無視して地上に降り立つとすぐに双剣を構える。

『3・2・1』

「どけーッ!!!」

青年の口から紡ぎだされる言葉とかぶる怒声
前方から迫ってくる鬼神の如き男

『・・・残念、ゲームオーバーだ』

醜い音とともに辺りに鮮血が舞う。

男はそのまま地面に倒れこんだ。

赤黒い液体が冷めた地面を覆っていく。

青年はそれに一瞬視線をやったもののすぐに目を閉じる。

『任務完了』

そう呟いて両手の双剣をしまい、路地脇の壁にもたれかかる。
いつの間にか月が雲で隠れていた。

明かりがないこの辺りにとって少々酷な状況ではある。

「何をしている・・・」

すると暗闇の中から甘美な声が聞こえてきた。

青年はその声の主に視線を移す。

『おまえを待ってたただけだ、他に何があるんだよ』

「それはこっちの台詞だ

殺り終わったらこっちまで来い」

2人の青年は互いに睨み合いながら言葉をかわす。

『その前になんでこいつ逃がしたんだよ
おかげで、俺が始末するはめになっただろーが』

「知らん、勝手に逃げただけだ」

『つまり逃げられたんだろ？』

「一度で理解しろ、逃げたんだ」

すると、黒髪の青年はこの言い合いがいかにも馬鹿馬鹿しいか気づいたのか、
もう片方の青年に怪訝な表情を向けながらも話を止めた。

『で、この死体はこのままでいいのか？』

「日が昇る前に回収班が撤去してくれる
俺達はこのまま本部に戻ればいい」

『へいへい、了解』

「なんだ、不満でもあるのか？」

探るような声に黒髪の青年は苦笑した。

『別に・・・ただ、人殺しの後の気分は最悪だなと思ってさ』

「ふん、相変わらず甘い奴だ
俺達はただ上の命令に従ってればいい
そんな感情は無意味だ」

『俺はおまえみたいな戦闘馬鹿じゃねーの
ピュアな心の持ち主なの』

「よく言う、ここまで八つ裂きにしておいて」

青年は淡々と呟き、地に横たわっている男を一瞥した。

『だって完璧に殺^やらねーと、おまえ怒るだろ』

「・・・当たり前だ」

黒髪の青年は目を細めて彼を凝視した。

さっきまで陰って見えなかった月が彼を照らして、なんもと幻想的
に見える。

それは月光のせいもあるが一番の要素は青年の整いすぎた風貌にあ
るだろう。

肩まで伸びた白髪に、翡翠色の瞳
適度についた筋肉が彼の美貌を引き出している。

『まあ、おまえはマトモな人間じゃないからな
俺の気持ちは分かんねーよ』

「分かりたくもないがな」

『左様ですか・・・』

黒髪の青年は呆れたように曖昧な言葉を返して歩き始める。

「帰るのか？」

『おまえはそのまま死体と一緒におしゃべりでもする気か？』

「寝言は寝て言え」

青年はそう言って黒髪の青年の後ろに続く。

『・・・無駄に疲れたな』

うんざり顔でぼそりともらし、歩みを進めた。

『あー、やる事ねーな』

古めかしいソファーに座りながら呟いた。

さっき任務から帰ってきたばかりで体が疲労困憊の上、
あいにく、いつも「お疲れ様ー」といって紅茶を出してくれる少女
が外出中のため、

自らの喉の渴きを癒してくれるものがない。

それも自分で作ればいい話なのだがこの男にはそういったやる気は
微塵も感じられない。

『おいヴァン、紅茶でも淹れろ』

「なぜ俺がおまえごときの為に茶を淹れなければいけない」

ヴァンと呼ばれた青年は反対側のソファーに座り、膝の上に広げた
本を読みながら答えた。

一般人と同じ行動をしても何故か絵になってしまうのはこの美貌た
め。

『少しは人間らしい事してみろよ』

近頃の女の子は家庭的な男が好みらしいぞ』

「女などには興味がない

ユーリ、冗談はその黒髪だけにしろ」

『おまえなー黒のどこがいけねーんだよ
好青年っぽくていいだろうが』

「美学の欠片も感じられん」

それはおまえの趣味の問題だろ？

と不遜な反駁^{ふそんはんぱく}を仕掛けたところでユーリは辺りを見回す。

大量の古い本が放つ独特の異臭が満ちる室長室。

今は2人しかいないため普段からだだっ広いと感じていたこの空間
が余計に広く感じる。

『なんで誰もいねーんだろな』

「この前の話を聞いていなかったのか？

今日明日は国との会合で上の連中はいない、あとは全員任務だ」

どこか威圧感のある翡翠の瞳がユーリを捉える。

『へえー、それは初耳だ』

「もはや愚かとしか言いようがないな」

自分の迂闊さを少し憎みながらもここで堪える。

それが一般社会における大人というもの。

この戦闘しか能がないお馬鹿ちゃんと張り合ってもらちが明か

ないのは重々承知だ。

『そんじゃ俺は外でのんびりしてくるとするか』

そう言ってソファから立ち上がりいかにもダルそうな足取りで部屋の前まで向かう。

「おまえの、のんびりは新鮮な空気を吸って気分を立て直す事か？
それとも新鮮な女を捕まえて遊ぶ事か？」

『そんなの決まってるだろ、後者のほうだ』

口角を上げ、自慢げに言い切る。

それにヴァンは冷ややかな視線を送る。

ユーリはその視線を無視してドアノブに手をかけた。

———次の瞬間、ドアが勢いよく開く。

案の定、それに対処できなかったユーリの顔面にドアの尖っている部分がクリティカルヒットし、そのままユーリは後ろに倒れこむ。

『俺の顔があ！』

悲痛の声が部屋中に響き渡る。

ヴァンも少し目を見開いてその様子を見据える。

「あれ、何か当たった？」

するとドアの向こう側で2人のよく知った者の声が聞こえてきた――

（続く）

episode 2 『啓人送り』

『誰だッ、俺の顔にクソ硬い物体ぶち込んでくれたのはッ!』

ユーリはなんとか体を起こし、いまだ見えない実行犯を睨み付ける。自分でもなんとも滑稽な状況だろうと心中では思っていたりもするが、

今は醜態をさらす事となったきっかけを追い込む方が先決なのだ。

するとドアからひよこつと小さいものが覗いているのに気づいた。

それは何処からどう見ても、誰がどう見ても人の頭であって、

決して異世界からやって来たモンスターとか、おとぎの国から迷い込んできたお姫様だとか

そんなファンタジックなものではない。

いや、別にそういう展開を望んでいるわけではないのだか・・・

「ユーリ? そんなところで何してるの?」

心地よい高いキーの声が聞こえてきた。

それによりいままでユーリの心にのた打ち回っていた殺意という感情が一気に冷めた。

『・・・ルナ、おまえだったのか』

「えっ、なにが?」

『いや、こっちの話』

ルナだと分かっていたらここまでの殺意が芽生えることはなかっただろうに。

なぜか損した気分だ。

「それにしても2人とも早かったのね
任務に出たのって一昨日じゃなかった？」

『ああ、案外早く終わった』

「さすがは？1コンビね」

そう言って柔らかく笑うルナ。
見てて癒されるのだがあいにくルナが発した言葉には同意しかねない。

『ルナ、冗談はよしてくれ

俺とこいつは根本的な部分から人としての波長が合っていない』

「珍しく意見が合うな、ユーリ

俺もこの男がパートナーだとは今でも信じたくない事実だ」

『年中無休の戦闘馬鹿がよく言う

その無駄に白い毛引っこ抜かれないのかよ？』

「黙れ、歩く生殖器め

俺はおまえと同じ空気を吸ってることが最大の屈辱だ」

「はいはい、相変わらず仲がよろしいことで」

この会話のどこをどう取ったらそういう解釈に至るかを教えてほしい。

第一、仲の良い奴がこんなに相手を罵るような暴言を吐くのだろうか……

「しかし、おまえも早かったな」

ヴァンが俺との会話を全てなかった事のように話をきり出す。

ちなみにヴァンから話を持ち出せる女はよほど親しい者でないといえない。

ルナとは長い付き合いだからヴァンも信頼してるらしい。

「今回のDランクの“咎人”だったからよ」

「それでか……」

Dというところかなりの低ランク者。

ユーリ達“咎人送り”は“咎人”を始末する存在。

世間にはあまり知られておらず、知っているのは国家の上層部や、国の自治を取り締まる聖騎団ほんの一握り。

咎人送りは全てここを拠点とするフォーゲル、通称『神判の庭』と呼ばれる組織に属している。

しかし咎人送りは今はもう数えるほどしか存在しておらず、そのほとんどは一年中仕事に追われる日々を送っている。

それに比べ、咎人は減るところが増すばかりで全てを始末するのは至難の業。

咎人というのは罪に罪を重ね、堕ちるところまで堕ちた者のこと。そのほとんどが精神崩壊し人の形を保っている者はないに等しい。

そんな者達を始末し天に召すのが咎人送りの仕事だ。

「疲れたでしょ？紅茶でも淹れるね」

『さすがはルナ、どこぞの役立たずとは大違いだ』

「それは俺の事か？」

『おっ、自分で自覚してたのか？

おまえも知らない間に成長したなヴァン」

「ユーリごときが俺を馬鹿にしているのか？

表へ出ろ、その減らず口今に聞けないようにしてやる」

『今世紀最大レベルでめんどくさいので却下』

「・・・殺す」

「いい加減にしろさい！」

その後はお怒りのルナによってみっちり説教をくらったのは言うまでもない。

（続く）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8462q/>

咎人のRequiem

2011年2月17日23時19分発行